

連珠叢書

四十七

特別
14
696
141



696
141



目錄

- 一 天保八丁酉大塩騷動之畧記
- 一 轉刻 志年定獄候上書嘉永六年
- 一 燒録 九鬼式部九輔教組中書
- 一 燒録 四邊寺信女往生畧記
- 一 議案録卷一 壹百三十三道



大塚發跡記



其有之於境之與海之凡之者幸人注也
其指之於海之 天子之長使下學其也
其指之於海之 天子之長使下學其也

大正

其有之於境之與海之凡之者幸人注也

其有之於境之與海之凡之者幸人注也

其有之於境之與海之凡之者幸人注也

大正八年
日 檢
深田 澤
小泉 澤
海 澤
去 見 於 其

平山公家

激田市公家
松中村公家
白井村公家
横山文公

山若内公家

公家
七公

印

深澤公家

金井公家

松中公家

上國公家

飯沼村

飯沼

印平公家

事尾

松中公家

松中

八公家

和羽郡山公家

平山公家
小見公家
信文
下下人
文

郡公八人
東郡
二下
下下
下下
下下

平山公家
大垣
下下
下下



鄉井幸長
藤岡郡二

大目金足人

大堰 平八郎

大目金足人



權足源長
松山傳之七

日

以下皆姓

沈尾法全和

志村周二

陸 松山三平

桂村孝三

高橋九吉

堀井辰吉

米岡丹六 尾山

河部長和

高野忠吉

日 名 吉

西村利三

陸 松山三平

五箇中雨情形致五方或新社致難瘳
而二下亦自難而解今日亦有夜而早出
火起りりりり

或人なるは 様情乃た方之致新而古来之
名古而海中之法之方自致以海大面古之
法大之海の様情乃た方之致新而古来之
之人致十方之海之海之何方之司
心之海之海之海之海之海之海之海之

河川及井中村之徒死

自致
西條田田之生業

東之方

日

日

日

日

東之方

東之方

日

日

大塩平八郎

日松一物

濱田清一物

大島三之助

小島源一物

大井一物

海老一物

吉尾一物

河合一物

高那与生捕

伊与与生捕

高那与生捕

高那与生捕

生捕

曰

高那与生捕

曰

高那与生捕

曰

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

自是毛髮...

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

曰

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

高那与生捕

松本守道と生捕

後死

西條と生捕

三浦と生捕

寺のりる浦のりる生捕

日人丸傳と生捕

日

白井城守長

横山久次

高島長和

河野忠房

頼國重房

松本村吉

上田守重

平山物次

松本和守

丸傳

日

日

大日蓮上人

大日蓮上人の石塔は大塚にあり

七和

三年

生捕

日

高橋忠房

横田山守

松本三平

高島忠房

西村忠八

日七和

生捕

日

河のほとけのまはるに廿二の御影があらはれり
ろくろのついでなり

流石なまの川に流る

あまのこゝろの御影のあらはれり

みづのほとけのついでなり

おまのまの川に流る

嘆みよれおまのまの川に流る

おまのまの川に流る

おまのまの川に流る

大堰のまの川に流る

かゞ見ぬまのあまの川に流る

大堰天満のまの川に流る

後たぢまのまの川に流る

天保八年のまの川に流る

所収百持のまの川に流る

天神のまの川に流る

大堰のまの川に流る

宝篋のまの川に流る

火の入云流るまの川に流る

細江流るるを 寺持也 道場也
他一層ある 社也 神也 并社也
尾島も有る 日場也 沼也 神也
天満也 惣舎也 宇尾也 云々
所傳之者 東市也 天満也
真田も有る 尾島也 山村也
程規也 云々 西も有る 云々
東も有る 云々 日也 云々
西も有る 云々 日也 云々
東も有る 云々 日也 云々

右様也 東也 廣き方七也
南也 廣き方八也
云々 云々 云々 云々
大塩の本の持也 書物也
是也 是也 是也 是也
云々 云々 云々 云々
人よ 人よ 人よ 人よ
草也 草也 草也 草也

命之類の政於澄西
世俗河難矣を法範とすたるたるたるた
某難河候ハをたるたるたるた

大塩父子年九減亡

予一々年九己之年九河沖柳所出火之年九難
強く山風烈矣抑強入公事速人殺年九連
孤獨之也沖公候出没人年九記年九其年九難
之出動之形候沖公候其後之年九言後之
より中年九志思を年九火事年九母候ハ年九見年九尚年九
河邊年九も年九方年九と年九手年九拍年九白年九海年九の年九沖年九色年九減年九
歳末年九而年九候年九成年九火年九の年九中年九拍年九公年九事年九候年九減年九
一 大塩平次父字年九の年九河沖柳所年九子年九之年九屋
年九の年九中年九拍年九公年九事年九候年九減年九
年九の年九中年九拍年九公年九事年九候年九減年九

素名彦上書

右平赤坂武平 衰弱之時、以爲今度
西墨利加之、要求一切由以、其故以、忽
兵艦上并、爭我、及、國家、安危存亡
抱、以、事、月、出、容易、可、在、難、在、極、事、以、
勿、誦、以、以、以、今、度、持、以、以、玉、書、亦、願、威
切、相、見、以、

神武帝、開、國、以、來、夷、狄、凌、辱、未、嘗、有
更、蒙、以、後、之、既、以、安、以、以、以、事、下、入、寇、以、時

兵燹之生——其意、從以少々、控へ、陸海
と文玉力我々、果てし、交易場と、故、今、中、
川、波、茂、高、館、と、乳、之、予、一、以、少、々、
不、今、年、号、令、少、以、中、清、心、一、大、邦、之、予、實
亦、少、日、中、一、被、陸、海、諸、事、と、以、以、更、不、多、成、地、而
力、不、お、包、乃、と、海、行、兵、一、お、果、少、々、と、波、是
以、先、陸、海、筋、也、本、以、彼、列、強、一、故、月、日、本
地、子、一、以、以、兵、一、交、易、ハ、陸、一、捕、獲、一、以、以、
不、以、更、亦、一、不、正、量、仕、以、予、一、且、一、以、許、容

永世不患^患——是、予、お、果、中、一、日、高、要、心、一、
交、有、之、予、交、以、且、海、兵、と、交、易、の、守、交、易
筋、以、以、一、お、故、少、一、定、之、兵、取、若、向、而、以、我
間、一、及、以、予、一、南、海、諸、島、亦、茂、交、侵、奪、以、故
我、有、之、少、以、予、兵、治、彼、予、一、同、以、以、故、一、以、我
以、若、不、謂、有、名、一、師、之、直、在、予、我、一、予、以、
及、他、之、情、復、一、切、も、得、以、勿、一、且、以、許、
容、一、上、以、他、之、兵、力、と、以、以、取、度、一、お、果、少、
曲、在、予、我、一、お、果、公、一、必、勝、一、翻、有、之、予、交、以

嘉永五年

八月十日

和平越中守

衣巻ハ生有跡ナシト名ハ定猷ト申セリ
了保十二年丑九月之如御長の家符也願
嘉永二年酉十月辰日位付尾上氣也也

嘉永六年丑八月十日大出番大鬼式部少輔

從中上諭亦書付

口演

當年ハ老ハ東四方ハ海峽上渡来ニ至
取モ度シ有之ハ上正以浦安海舟送還
事情ハ申シ不審易事ハ申シ
致一以言実ハ森原ト申事ハ申シ
他以右ト申シ色及内渡ハ有テ又
以以ハ受取方ハ役内密ニ申送事終

佛説の如く定中の所見は空羅と云ふを
この正觀と爲すは若くは空の者たるを
妄想と爲すは空の所見たるを
あり蘇空と爲すは空の所見たるを
羅と爲すは空の所見たるを
空と爲すは空の所見たるを
空と爲すは空の所見たるを
空と爲すは空の所見たるを



還弄信女
 北佛の御
 海の幸の
 祈願
 庄八
 の

正の形者... 振る園果の...
 觀... 願釋... 心信...
 寺... 知...

陽燄唐符...

執手...

時... 八十四

身念を知らず、あま云々汝汝憂る事か、し終
於及汝憂へ還さとも必定ぬ、我汝を伴ふ一途平
滅後も到る、又汝様より、又此の事、又此の
身念を知らず、又此の事、又此の事、又此の事、
我取不捨の巨益を伴ひ、我若くは、我若くは、我若くは、
強の事、又此の事、又此の事、又此の事、
の相、我我の事、又此の事、又此の事、
淨く、又此の事、又此の事、又此の事、
疑心の事、又此の事、又此の事、
さ、又此の事、又此の事、
後、又此の事、又此の事、
あ、又此の事、又此の事、

事、又此の事、又此の事、
下、又此の事、又此の事、
小、又此の事、又此の事、
悔、又此の事、又此の事、
人、又此の事、又此の事、
狂、又此の事、又此の事、
松、又此の事、又此の事、
後、又此の事、又此の事、
知、又此の事、又此の事、
新、又此の事、又此の事、
言、又此の事、又此の事、
の、又此の事、又此の事、

後の世に... 佛菩薩の... 南無阿彌陀佛

慶應三丁 拜暮冬

天竺山 定信 藏印



為 父從祐 母榮春 各蒙進福

鳴海山中 亮光印施

明治二年春三月

議案錄

第一

- 第一 新規株式御許相成候様仕度議
- 第二 度量ヲ同クスル之議
- 第三 火幕御廢止之議
- 第四 中大夫以下土著可然之議
- 第五 通稱ヲ廢シ實名ヲ以テ可用事
- 第六 赦令御廢止可然之議
- 第七 大名領分飛地無之様仕度議
- 第八 罪人之財產ヲ没入スハカラサル之議
- 第九 切腹禁止可然之議
- 第十 人ヲ賣買スルノ事禁スベキ之議

新規株式御許相成候様仕度議

是迄新商賣工夫仕候者ニ株式御許ト申事無御座
 候間折角元年ヲ費シ善工夫ヲ致シ候テモ奈人直ニ直似
 仕候最初心工夫仕候者ハ元年手モ取方ニ兼候右故自然
 新規ノ工夫ヲ不致様ニ成行日新ノ御趣意ヲ失ヒ候様
 至至申候依之此度別段改テ御布告有之以來都テ
 新規商賣申立候者工ハ其様ヲ御許ニ相成云云
 同業ノ者無之様被成下度如左代梯ト申譯ニハ
 無之十年又ハ十五年ノ御定其者元年手ヲ取方ニ候上
 相應ノ利分ヲ得候様尋常候若シ右年限中ニ同業
 相始度存候者ハ梯至ハ亦談ヲ廢テ候様仕度且又右株
 式御許ニ相成候様上ハ相商御違上ノ梯至ヨリ相納候様被
 仰付度存候者ハ右様相成候様尋常候若シ右年限中ニ同業
 者多分ノ儲可有之候者ハ右様相成候様尋常候若シ右年限中ニ同業
 遂ニハ御國繫累目録ニ基共可相成云云存候

無ノ右

度量ヲ同フスルノ議

公議所書記

小野清五郎

度量ノ二者ハ割度ヲ定ムル本原ニシテ和漢西洋共之ヲ
慎重スルハ勿論ナリ本邦上代ノ事ハ置テ論セム方々專ラ
用元氣ノ度ニ三種アリ一ハ蘇天ト名ツク衣履ヲ裁ク事
專ラ之ヲ用テ一ハ曲天ト名ツク木匠專ラ之ヲ用テ其他
猶數種ノ尺アリト傳聞仕儀量ニ又甲州ニテハ武田氏ノ遺刻ニ
因リ三帛ヲ以テ一帛トナセリ右様度量ノ刻一定セザルニ
ナリ茲高商等其時ノ便ニヨリ或ハ曲天ヲ用ヒ或ハ蘇天
用ヒ以テ人ヲ欺クノ伎倆ヲ施セリ且物ヨリテ同スル所ノ
尺ニ不同アルハ煩雜ト云フベシ以テ末ニ度ハ曲天ヲ以テ正
トシ其餘ハ都テ廢棄シ量ニ又通常ノ刻ニ異ル
者ハ一切廢棄可クト奉存候

火葬御廢止ノ議

下総四苦原郡加茂園村
百姓 權三丞

并註管見ノ微事奉申上候今般
御維新復古養老ノ御仁政被
仰出祖恩私共迄難有奉存候夫ノ孝ハ百行ノ源徳ノ基
植終遠遠モ孝ノ一事ト奉存候先朝
持統天皇ノ御年火葬初ニヨリ以テ未親ノ身體學會ヲ火
灰ニテ埋葬ニ働矣洋法セズテ却テ愉快葬送ニ禮ト心得
皇國ノ凶體ニ皆ノ儀弊ノ風痛心歎息罪在臣等今般
御維新ノ新柄忌諱ナク可申上旨被
仰出候身不願恐奉申上候舊幕ノ政事ニテハ新ニ墳墓ヲ
築事創禁ニ御座候私共並邊村ノ墳墓ノ地狹迫ニテ
民ハ必ク相増スニ至テハ墓ニ葬地モ無ク人死スルトキ
ハ無墳葬體學會ニ火灰ニ父祖ノ先骸骨有之候地
再ニ掘取中テ其骨灰ノ埋葬仕候且父祖死ニ數月
経カシテ又火葬仕候存有之候前ニ記セ父祖ノ骸骨ヲ
埋葬キテ其埋葬仕候是子ノ父ノ道ニ相背キ痛心歎息
罪在候得共墳墓狹小新築創禁ニ有之候間不得已困苦
罪在候當今

更始ノ初天下火葬ヲ嚴禁ス其被
仰由新ニ墳墓ヲ布毛ノ也ニ錄ヲ修撰奉願儀

中大夫以下土著可然ノ談

福智山議貞中野齋

今度中大夫以下東京定府被
仰付修撰ニ詳承仕候其旨是非不問候得共弟以有之面ニ書
仰付修撰方可然成ニ奉存免候未下領ハ多分其政儀
散法抄ニ難改行成行修故御難新ノ際其至テ
邑ニ施シメ民風一洗ノ盡力當今ノ急務ト奉存免
且大御會ニ在任仕候侍者士卒ニ至迄益業弱窮
姓將ニ不異修撰不相成奉存免候

通稱ニ廢之實名ノミテ可用事

第二

亦官位ヲ以テ通稱ニ換ル等々等ヲ稱ニ上下一般
實名ノミテ可用事

姓名ハ本ト各人ヲ分別スルノ者ナリ然ルニ本邦從來通稱
實名ト云フニ者アリ通稱ハ何兵衛何左衛門等ノ類是ナリ
然ルニ今其本原ヲ尋メルニ多クハ皆官名ナリ或ハ又別ニ異稱
ヲ有スルモヤリ其官ニ邪スモテ又稱ニ其實名ヲ用ヒテ異
稱ヲ設ル等其不經ナレ固ヨリ論ヲ持タズ又官位五位以上ニ
至テハ其國守國介ニ邪スレテ濫リニ其ノ守其ノ介ト稱シ
稱ハ大和守ト稱スル者モ真ニ大和國ニ守ル者ニ邪ナルノ
類比ニ是ナリ其外其ノ羅修某ノ君侯ト其後ヲ以テ其通
稱ヲ稱ハ候同姓同位ノ者有リ時ハ稱呼混淆シテ何人タルヲ
辨識シ難キニ至レリ是皆實名ヲ不用ノ故ナリ且又實名ハ
其字數モ簡約ナレトモ通稱ニ至ッテ或ハ一字或ハ二字或ハ
又五六字ヲ用ユル者アリ實ニ煩雜無紀ノ至リト云フニ
故ニ以テ一切通稱ニ廢シテ亦官位ヲ以テ通稱ニ換ル
等ノ弊モ廢シ貴賤上下都テ實名ヲ相用修撰
可然奉存候

教令御廢止可然議

會計官權判事

神申孝年

窮ニ業スルニ

朝廷ニ告出テ大禮ヲ見ル毎ニ教令ヲ行ヒ罪人ヲ放ツルハ和漢古
今ノ常典ナリ然レ其理ハ頗ル不經ニ屬スル者アリ夫レ
人若ク人ヲ刑スルハ好テ之ヲ善クシテ罪人ノ窮ニ一人ヲ罰シテ
數人ヲ救ハントノ趣意ナシ其形ハ不仁ニ似レドモ其旨ハ
至仁ヲ行フナリ又ニ友ニテ教令ヲ行フ時ハ人ヲ救フカ為
管口口數人ヲ溜シントノ趣意ニ當リテ其形ハ至仁ニ似タレ
其旨ハ不仁ニ甚敷ナリ且夫罪輕クシテ教令ハキ者ナレハ
朝廷ニ大禮アリト雖教令ハカラス教令ニ已カサレドモ
朝廷ニ大禮ニ關係スルキ一ニ非ス況ヤ刑律ハ永世ノ法ナリ
教令ハ一時ノ事ナリ一時ノ事ヲ以テ永世ノ法ヲ破ル可ク
ヤ此數ノ者皆義ニ劣リ理ニ及ス故ニ云煩ル不經ニ屬スル者有
之及今文明日進ノ際此等ノ事モ又御改正アルヘキニ似タリ

如何

大名領分飛出無之様仕度議

上総四郡射郡

真行寺和泉

諸大名領分其身上ニ寄或ハ一團一團或ハ一郡一團或ハ
一郡一團下ニ賜候様仕度奉ル候舊幕府徳川源家康公
ヨリ三四代ノ間ハ一團一郡一郡等ナリ一團ニ定行申候處迄未
此所ニ村莊行ニ二村所ノ邊也ニ定行候之就テハ自若領
分ノ取締モ名所在地方掛リ役人俸給ノ書種々ノ弊害ヲ
生シ申候具又各藩實仁苛酷不同御座候得テ廢止
人撰請圓工監察使ヲ以可否由直御糺明賞罰嚴
重

御沙汰被
御出候様奉存候

罪人之財產ヲ没入スベカラサル之議

公議所書記

小野清五郎

夫レ人ニ貴賤賢愚之別アリト雖モ我ノ生命ヲ愛ス我
之財產ヲ護ルニ至而ハ其心同一ニシテ是モ異凡事ヲ故ニ
國家刑罰ヲ設クル之趣意モ畢竟不得志トコニテ人ヲ
罰シ其心ヲ懲ラズ之所以也文明開化之國ニ於テハ之ヲ
慎重シテ是モ其刑ニ私ヲ用ズル事ナシ然レニ本邦古
來之風習罪アル者ノ財產ハ盡ク之ヲ没入シ之ヲ國府
ト若ク其是レ人ヲシテ之レ之財產ヲ保護スル能ハサレ
非ズヤ其弊ナ極言スレバ政府人ノ罪アルヲ率トシテ其
產ヲ没入シ之レ之私ニ供スル之理ナリ是等之輩文明開
化之國ニハ無之義ト傳聞仕候國家
御維新之際斷然此等之輩御廢シ以テ未罪人ノ
財產ハ其妻子或ハ親戚等へ盡ク與フベキ義可
然存候

切腹禁止可然ノ議

公議所書記

小野清五郎

本邦士ヲ利スルニ切腹ノ俗アリ又其人ノ罪贖味ニシテ妻
定ラガル者多クハ自ラ切腹シテ其罪ヲ償フ是レ本邦武
川ノ士暗ニ稱揚スル所ナリ然レトモ切腹ノ事西洋各國
ニハ絶テ無キ所ト存及候且命ヲ奉ニ切腹スル者ハ極可
ナリ命ヲ待タズニテ切腹スル者ニ至テハ不經ノ甚敷ト云
ベシ如何トナレハ其人果シテ無罪ナク到底辯解己レノ
冤ヲ白スベシ何ゾ切腹ノ舉ニ至ラニヤ又其人果シテ罪有
則レ刑憲アリ甘シテ罪ニ服シ
朝裁ヲ待ツベシ何ゾ切腹ノ舉ニ至ランヤ是レ國家ノ刑憲
ヲ蔑シ罪ヲ償ハントシテ却テ罪ヲ添ルノ道理ナリ且夫
此等ノ士多クハ氣概アリテ辱ヲ知レル者ナリ一旦自悔
ヒ奮發激勵セバ國家ニ裨益アルハ勿論ナリ然レニ一
疑似ノ罪ニヨリ殞命ニ至ラシムルハ人ヲシテ自改ノ道ヲ塞
ガシメ國家資材ヲ御趣意ニ相成リ候儀ト存候今般

御新之際此等ノ事御禁止相成候方可忍奉存候

人ヲ賣買スルコトヲ禁スルノ事

刑部官権判事

津田貞一

人ヲ賣買スルコト元来有刑罰ナリ和漢西洋共古来人ヲ賣買テ奴
婢トスル惡風アリ奴婢人ヲ車馬ニ同シラスルモノニテ人道官刑
ニ極シニ從テ此惡風追々消去タリ然レニ
皇凶目今猶娼妓アリ娼妓ハ年季ヲ限リテ賣ラレタル者
ニテ年季中ハ年馬同様ナレモナリ此娼妓アル故ニ女子ヲ賣
買スル惡風アリ女子ヲ賣買スルコト又故ニ人ノ魂女ヲ勾引シ
略奪スル惡事アリ願ハクハ今日ノ衆人トテ人ヲ賣買ス
ルコトヲ禁止シテ女子ヲ賣買スルコトハ未タ出来ヌ
一ナレハ昔樓ハ舊ニ存置ルハ然ラバ娼妓ハ奈何ニテ
アルベキト云フニ俗ニ所謂地獄賣物ト同標ノ振ナルベシ西洋
諸州ニ女房アルハ即此法アリ故ニ彼地ニテ女房ト云モノハ
貞節アリク懶惰淫奔ノ女自好シテ地獄ニ墮ルナリ其地獄ノ

苦ヲ受ルハ即所謂自業自得ナリ此方ニテ隨分貞節正シ
キ女モ惡父母伯兄等ニ賣ラレ又勾引サレ賣ラレテ苦海ニ沈ムモ
ノト其情實堪憐隔ナリサレト猶各ヲ取ルモ取ラヌモ勝手次第ニテ
進退自恣此方娼妓ノ苦ニ比スレハ至テ樂ナレモノナリト思フ

官版御用

神田旅籠町二丁目

御彫刻所

竹口瀧三郎

本町四丁目

御書物所

上州屋惣七

義彙録卷二

明治二年夏四月

第十一 刑に付するも私人常と税のを禁する後

第十二 租税の議

第十三 邦人種々のいふ處に依

第十四 市厚の法に設る地稅と納るるを應じ

第十五 田池所出の物に賣買の儀

第十六 土佐の下藩に對する位階と定むる儀

第十七 漢書及牙法の事用ひ

第十八 蘇多の事

第十九 金銀貨の事

